

## 顛倒論

vipallāsakathā

顛倒、すなわち「道理に背く誤った考え」の四項目をあげて、順に従い、意図にそって述べてそれぞれの解説をする。

およそこの世界にあるすべてのものは、生物であろうが無生物であろうが、生じたことには原因があり、その成り行きは原因に依るものなのである。

パーリ律蔵には、アッサジ比丘がまだ在家修行者であった頃のサーリプッタに述べ聞かせたこのような言葉がある。

Ye dhamma hetuppabhavā

もろもろの法は原因より生じる

あらゆるものの形成がなされる原因であるその状況をサンカーラ (saṅkhāra 形成力、現象) と呼ぶことがあり、また、それ自体の特性に従って保たれている状態をダンマ (dhamma 法、ものごと) と呼ぶこともある。

ものごとを正しく理解できることも、誤解してしまうこともあるのが人の常なのだが、誰にとっても一度思い込んだその思いを転換することは容易にできることではない。

言うまでもなく、正しく理解した場合と誤って解釈した場合の行動の結果は大きく異なるものになり、正しい理解はその行いを意義あるものにするが、誤解したままの行いにあるものは損失だけになる。

たとえば何処かに出かける時、その場所が近い所であっても、遠い所であっても、実際の距離はそのまま変わることはないので、行き方を正しく理解していれば間違えることなくその場所に着き、大切な時間を無駄にすることも無いのだが、行き方をよく理解していなければ何度も迷ってしまい、目的地に着く実際の距離よりも長い距離を迂回して行くようなことになり、そのために余分な時間を浪費することとなる。

私たち人間をふくめ、有情世間 (sattaloka) といわれる生物界に住まうすべてのものは果てしのない道、つまり輪廻 (vaṭṭa, saṃsāra 流転) の中において、生死の

繰り返しに終わりのない道を歩み続けている。

仏陀は世の人々に、どのようにして真理に基づいてものごとを正しく理解するのかということ、その原因と結果を示して説いたのであり、仏陀のその教えに出会い、聞く事ができた時、人は生じた智慧によってものごとの因果を明瞭に知ることになり、連鎖する生死の終局、すなわち、涅槃(nibbhāna)に至るということを了知したのである。

このことは仏陀が述べられた教説として、\*<sup>ほうけつじょう</sup>法決定経(dhammniyāmasuttam)の中で次のように示されている。

Uppāga vā bhikkave, tathagatānaṃ anuppādā vā tathāgatānaṃ,  
ṭhitāva sā dhatu dhammaṭṭhitatā dhammaniyāmatā.

比丘たちよ、如来が出現していても、出現していなくとも、  
それは自然の法則なのであり、確定し、定められている。

タイ版三蔵(C)第20巻／増支部経典・戦士品／ p.385

それはつまり、すべてのサンカーラ(形成力、現象)は定まることがなく苦であり、すべてのダンマ(法、ものごと)は無我である、ということであり、その自然法則について如来は正しく理解したことによって、それらを彼らに告げ、はっきりと知らしめ、提示し、公にしたのである。

仏陀自身が見て知ったことであることによって、世の人々を導くことができ、その教えによってものごとのあり方を法に従って正しく理解する智慧を得た者は次のように述べて仏陀を称賛した。

「あたかも、うつ伏せに倒れていた者を仰向けにして起こすように、何かに覆われ隠されたものを<sup>あら</sup>顕わにするように、迷いし者に道を教えてあげるかのように、そして、見る目を持つ者に暗闇に灯った炎を見せるように、そのようにして様々な例を用いて法を示された」と、この様に。

---

\*法決定(dhammaniyāma)－生じ、存在し、消滅すること－例えば人が生まれ、老いて、消滅することは法性であり、仏陀の誕生があろうとも無かろうともすべてのものごとは無常であり、苦しみを伴うものであり、固有の自己とされるものはない、ということ。

上に述べた「すべてのサンカーラ」とは、現象世界の等しく一律な特徴をもった三種の事象のことであり、つまり……

1. 生じることを始めとして、時とともに変転し、終局的には壊滅する。  
そのあり方の表徴を「無常相」という。
2. 現象世界は元の状態を保つことができないこと。つまり、耐性がない  
そのあり方の表徴を「苦相」という。
3. 望み通りになることがないということで、自己のものとすることはできない。このあり方の表徴を「無我相」という。

これら、現象世界に見られる三種の特質を共相(sāmañña-lakkhaṇa)と呼び、その意味は「一律に持つ特質」となる。

サンカーラについての解説をさらに詳しく述べると次の様になる。

共相とされる三種の特質の中の無常相と苦相について、人によっては考察可能な領域にあると言えるが、無我相は常識的な思考の及ぶところではなく、人間の認識や理解の限界を超えている。

例えば、ある人の死に直面したり、その知らせを聞かされた時、人は驚愕し悲嘆にくれて「無常」を口にすることがあり、また、体や心に何らかの苦痛を受けた時には、その苦しさを言葉や表情で表す者もいるのだが、「私は私のものではない」などと言う者はまずいない。

それは知識豊かな哲学者であっても同様で、彼らは宗教家でなくとも大衆に向けてこれらの事柄を教え説くことがあり、例えば、無常はすべての生物の、生まれてから死ぬまでの長くない命の在り方によって示し、苦については、病いなどのある命の危うさを示すことによって、その顛<sup>あら</sup>わになった苦を解説する。しかし、無我については、洞察し、他の人々に教え説くことのできる者はごく限られていると言える。

この事柄については、仏陀の説く所となるパーリ経典のアラカ経によって考察し、論証する。

Bhūtapubbaṃ, bhikkhave, arako nāma satthā ahoṣi titthakaro kāmesu vītarāgo.

比丘衆よ、過ぎたる昔にアラカという名の、もろもろの欲望から離れたあるひとりの教祖がいた。

タイ版三蔵(M)第37巻／増支部経典・アラカ(教誡)経／pp.224-227

仏陀はこの様に述べられ、そのアラカ師は数百人の弟子達に次ぎの様な教えを続けて説いた、と語った。

「すべての人間の命は僅かなもので、時を待たずに失われてしまい、苦しみや悩みが多いのである。そのことを智慧によって了知すべきであり、善を為し、清らかな行いを為すべきある。

生まれた者が死なないということはないのだ。」

「草葉の露のたとえ — 草の先端の露は日が昇ればすぐに蒸発し消え去ってしまい、長くその場に留まることがないように、人として生まれて来た誰もが老い、病み、百年を待たずに死んで逝くのであり、その人の年令にかかわらず、長く存在することはなく火に取り囲まれて消えてゆく。」

「水泡のたとえ — 雨が降り、大きな雨滴が激しく水面を叩きつける時、いくつもの水泡が発生するのだが、瞬時に壊れてしまい長く留まることはない。私たちも同様で、原因となるものが集まって生じたこの命も、その原因が離反し、崩壊してしまったら直ちに消え去ってゆく。」

「水面の痕跡のたとえ — 木の枝を持ち、水に差し込んで線を引くように動かしても水を仕切ることはできない。枝を動かしている間だけ瞬間的にその痕跡が発生するが、すぐに元の水面を取り戻す。命は瞬間的に発生する痕跡の様なものであり、何らかの縁があることで形成がなされても、縁が尽きればその存在は直ちに消滅する。」

パーリ経典には比喻となる次の様な偈文がある。

Āyu usmā ca viññāṇaṃ, yadā kāyaṃ jahantimaṃ;  
apaviddho tadā seti, \*ettha sāro na vijjati.

寿命と体温、そして意識。いつの日かそれらが身体を離れ去った  
その時、捨てられて横たわる身体は実体なきものとなる。

「流れる川のたとえ — 山の溪流を素早く激しく流れ落ちて来る水は、あら  
ん限りのものを遠くまで運び去る。瞬時も留まることなく、ただひたすら  
に流れ行くその川の流れの様に、経過して行く日々が止むことなく人の命  
を運び去ってゆく。」

「唾液のたとえ — 力の強い男は舌の先に唾を丸めて吐き出すことを何気な  
くする。この命は、その吐き出された唾が消えるように容易に消え去る。」

「焼かれた肉片のたとえ — 一日中熱せられた鉄のフライパンに投げ込まれ  
た肉片は焼け残ることなく消え去る。煩惱と苦悩の火に余すところなく焼  
き尽くされるこの様な状況に、この命は長く耐えることはできない。」

「屠殺される牛のたとえ — 牛が屠殺場に運ばれる時、その直前に、どん  
なに足を高く上げて見ても死が間近にせまっていることに変わりがないのと  
同様に、この命も日夜過ぎ行くまま、その終わりに近づいて行くだけであ  
る。」

以上の如く、アラカ師の論証を例に挙げたわけだが、この様に、仏教以外  
の教説では、無常のあり方と苦のあり方のみを解説して大衆に示しているだ  
けであり、仏教のみが無我を取り上げて教えを説いているのである。

---

\* パーリ相応部経典、蘊相応、華品のこの箇所は parabhattaṃ acetanaṃ. (意思は無く他の生  
物の餌になる) タイ版三蔵(M)第27巻 / 相応部 / p.303

仏陀は開悟を為しえた後、法輪、すなわち真実の教えを五人の比丘衆に教示され、その比丘衆の長であるアンニャー・コンダンニャに法眼を得させ聖者の流れに導いた。そして他の四人については、別の様々な教えによって同じ流れに、つまり預流果(sotāpattiphala)とされる状態に至らしめ、その後に\*「無我相経」を教示された。それは「自我」とされる自身の心身環境を五つの要素・集まり、として捉えさせるものである。

つまり……………

- ① 身体は色(rūpa 肉体・物質)の集まりであり、
- ② 感受作用、すなわち苦や楽、そのどちらでもない感覚は受(vedanā)の集まりであり、
- ③ 色、形などを心にイメージする作用は想(saññā)の集まりであり、
- ④ (善、悪などの)対象を心に生じさせる思考作用は行(saṅkhāra)の集まりであり、
- ⑤ 対象認識をする心の作用は識(viññāna)の集まりである、とこの様に。

これら五蘊ごうんとよばれる五つの要素・集まりの、それぞれを無我、つまり自己でないものとして見定め、深く洞察するように教示したことで、彼らは最高の聖者とされる阿羅漢あらかんの境地に至ったのである。

その教説は、Rūpaṃ bhikkhave anatta (比丘衆よ、色(身体)は無我である)から始まるもので、続いて、受、想、行、識は無我なりと述べ、もしそれらが自我(自己)であるならば、病気になることもなく、誰もがそれらを思い通りにすることができるはずだ。しかし、自我(自己)ではない色、受、想、行、識に対して、この様であれ、この様であってはならない、とすることは誰にもできないのである、と教示した。

---

\* 無我相経(anattalakkhaṇasutta) タイ版三蔵・注釈(M)／第6巻 律蔵 小品／pp.25-29

南伝大蔵経／第三巻 律蔵三 第一犍度／pp.27-26

ウ・ウェーブツラ著『基本聖典』／無我相経／pp.75-79

続いて五比丘に対して、三相(無常、苦、無我)の知見に基づき五蘊のそれぞれについて見解を質した。

Taṃ kiṃ maññatha, bhikkhave, rūpaṃ niccaṃ vā aniccaṃ (色(身体)は常住(変化しない)なのか、無常(変化する)なのか)、そして、受、想、行、識の要素・集まりは無常であるか、そうではないか、との問いに対し五比丘は、

— 大徳よ、無常であります、と答えた。

無常なるものは苦なのか、楽なのか、との問いに対し、

— 大徳よ、苦であります、と答えた。

無常なるものは苦であり、その様に常に変転して定まることのないものを、「これは私のものである」「これは私である」「これは私の我である」と見るべきだろうか、と問われた比丘衆は、

— 大徳よ、そうではありません、と答えた。

比丘衆よ、その如くなのだから、どの様な色(身体)であれ、受であれ、想であれ、行であれ、識であれ、過去の、未来の、現在の何であれ、内的な、外的な、粗大な、微細な、劣ったものであれ、優れたものであれ、遠くにあるものであれ、近くにあるものであれ、すべての色(身体)、受、想、行、識を、「これは私のものではない」「これは私ではない」「これは私の我ではない」と、真実のままに正しい智慧によって見定めるべきでなのである。

続いて、仏陀は観による洞察の善果を示して次の様に述べた。

Evam passam, bhikkhave, sutavā ariyasāvako(比丘衆よ、教えを聞く聖なる弟子はこの様に見て)、色について\*厭う、感受について厭う、想について厭う、行について厭う、識について厭う。その心はすべての漏(āsava 煩惱)から解脱する。解脱すると解脱したと洞察する智慧が生じる。そして「生まれは尽き、梵行、すなわち清らかな修行は成就した、他に為すべきことはない。」と、明瞭に知るのである。

---

\* 厭う(nibbindati) — 厭(nibbindā)・厭離は執着していた状況にあるものごとが、すでに壊れていて、不完全で、いかに災いの多いものであるかと認識すること。

無我のあり方を論証するこの様な教説があるのは仏教だけであり、仏陀はまた、他の事柄よりもこの無我相によって教えを受けることが多かった。

なぜなら、自己へ執着、我への執着、他者への執着がまだわずかにでもあるならば、苦からの離脱はわずかにも為しえないものだからである。無我、つまり「我はないこと」はすべてのサンカーラに等しくある共相なのだが、それを洞察しえる者はいない。

仏陀の教えを聞く事ができ、無我のあり方を理解できた者にあっても無明、つまり無知なる愚かさによって不変なる本性としての真実は覆い隠されてしまう。その時、自己であるとか有情であるとか個人であるとかいった認識を捨て去ることができるならば、法の実相だけが了知されるのであり、それは今まで述べて来た様な心身環境を「五蘊」として見るだけでなく、

例えば<sup>\*-1</sup>「六処」として見る、つまり……

眼、耳、鼻、舌、体、心は、色(形)、音(声)、匂い、味、接触、法を待ち受け、それらが入って来ると思考経路が生じ、順次に様々な思考が形成されることになる。

あるいは<sup>\*-2</sup>「六界」として見る、つまり……

地界(硬い要素)、水界(流れる要素)、火界(温かい、あるいは熱い要素)、風界(吹く風の要素)、空界(空虚な空間)、識界(明瞭に知る作用)として。

あるいは<sup>\*-3</sup>「六根」として見る、つまり……

眼根(視覚能力)、耳根(聴覚能力)、鼻根(嗅覚能力)、舌根(味覚能力)、身根(触覚能力)、意根(知覚能力)として。

あるいは、簡略的に<sup>\*-4</sup>「名色」として見る、つまり……

心(精神作用)と色(身体、形、物質)として。

\*-1 六処(cha-āyatanāi) – 認識領域の主観の側が六内処。客観の側が六外処。

\*-2 六界(cha-dhātuyo) – 心身環境を構成する成分・要素の四界(地、水、火、風)に空界と識界を加えて六界とする分類。

\*-3 六根(cha-indriyāni) – 樹木の根のように心身の活動に大きな作用をもたらす六種の能力。

\*-4 名色(nāma-rūpa) – 名は五蘊の受想行識、すなわち精神面。色は物質、形態面を意味する。



これら心身環境を構成する要素は、舟と舟を漕ぐ人が別の存在であることによって航行が可能になるように、成り立ちを異にすることによって働きが生じる。しかし、その関係性から引き離されてしまったらものごとの生滅はなく、異なった法のそれぞれを構成する要素が離合集散しているだけになるのである。

無明の中にある者に不変なる本性としての真実が顕わになることはない。

仏陀は、世間の者により良く理解させるために法を分別して説いたことにより、何かに覆われ隠されていたものを顕わにする方、とされたのである。

— 無我について —

あらゆるすべてのものは様々な縁、つまり関係性に於いて形成され流動体として存在している。その存在は互いに依存し合い、生じたら滅することが絶え間なく繰り返されている。

つまり無常なのであり、関係し合っているそれぞれの存在の生滅も確定しうるものではなく、安定することもない。その様な関係性に依存することになれば、そこには当然のことながら抑圧や軋轢があり、その存在が欠陥だらけで完全でないことが明かにされる。

この様な因縁に繋<sup>つな</sup>がれ生死を繰り返す流れにあるすべてのものも、そのような因縁に繋がらないものも、自然法則に従った状況にあり、その存在にこの様であれ、あの様であれと希望通りに命じ、統制や強制のできる者として真の実体となるものは何もない。

P.O.Pyuttō 著『仏法』2019年タイ語版 I - p.64

ブッダの教えによれば、「私には自己がない」という考えも、「私は自己を持っている」という考えも、ともに間違っている。

なぜなら、両者ともに「私は存在する」という誤った感覚から生起する足枷<sup>あしかせ</sup>だからである。アナッタ(無我)の問題に対する正しい見解は、いかなる見解にも見方にも固執せず、心的な投射を行わずにものごとをありのままに見ようとすることである。私たちが「私」「存在」と呼んでいるものは、各々が独立に、因果律に従い刻一刻と変化する物質的、心的要素の結合に過ぎない。

そうした存在には、恒久で、永続し、不易で、永遠なものは何もない。

Walpola Rahula 著『ブッダが説いたこと』pp.146-147

…………… 身体や心についても同じことが言える。これらも絶えず変化しているから、それだけ自己から離れているわけである。それらは自己ならざるものによってゆく性格を持つ。それらは我所とも言えないし、我とも言えない。

無我の教説は、本能的習慣的になっているわれわれの見方に根本的変革を要求している。そのために繰り返しこの見方を修練することが必要である。この修練を「無我観」という。

平川彰著作集 第2巻『原始仏教とアビダルマ仏教』 p.224